

B. 生徒指導に関する研究

鈴木洋一郎 中野 満男 米山 誠 服部 晴子
 米田 潤一 丸山 豊 斎藤 真子

中学生の生活と意識

— 名大附中学生の実態を中心に —

米 山 誠

1. 中学生指導の当面する問題点

中学・高校生の自殺、長期欠席等が年々増加しているようである。警察庁のまとめによると、1978年1月～12月の1年間における少年の自殺者は866人（前年に比へ82人増）、そして、1979年1月の1か月間における少年の自殺者は104人（前年同期に比へ26人増）、うち小・中・高の生徒は60人で、自殺の動機・原因は学校問題が最も多く31人、次いで家庭問題15人、男女問題14人となっている。⁽¹⁾ また、『朝日新聞』（53.10.7）は、「学校きらい中学生増」という見出しで、文部省の「53年度学校基本調査速報」（53.5.1現在）の主な内容を紹介している。それによると、52年度中の中学生の長期欠席者は26,874人（前年度より1771人増）で、そのうち、学校きらいを理由とするものが9804人（前年度より1450人増）である。

このような問題はもっと未然に防ぐことができないものだろうか。ともあれ、親や教師の、子ども・生徒に対する深い理解・洞察と適切な判断・処置が求められていることは言うまでもない。自分の子ども・生徒について、親や教師はよく知っているつもりでも、はたして、本人か何を考え、何を悩んでいるのか、その内面まで深く理解できているかどうかは疑問である。死のうと思ったことのある生徒の数は多く、愛知県のある高校の調査（1973年）では、1年生31%、2年生57%、3年生57%、全学年で47%を占めるそうである。⁽²⁾ また、望月一宏氏の調査によると、「死にたいと思ったことかあるか、ないか」というアンケートに対して、中学3年生40人中の31人（77%）が「ある」と答えたそうである。⁽³⁾

中学生の頃は、めざましい成長期である同時に、子どもからおとなへの発達の過渡期として、身体的にも精神的にも不安定であり、危機をはらんでいると考えられる。しかも中学生をとりまく現代社会の実情は矛盾に満ちている。一人ひとりの生徒について学校と家庭との間で、目のテスト、成績、進路等の心配だけでなく、性格、能力、日常生活、将来の目標等本人の

人間性に対する根本的な理解を深め合う配慮こそが大事なのである。生徒の態度が、学校と家庭とでかなり異なることが少なくない。学校ではいつも無口な生徒が、家庭ではよく話すとかが、学校では最も目立たず、いつもつまらなさそうに見える生徒か、「うちの子は毎日学校へ行くのが楽しくて楽しくて」と親には見るとか、逆に、学校では快活そうに見える生徒か、家庭では複雑な悩みを抱えて悩んでいるとかの場合である。保護者との懇談で、学校ではわからない一面を聞いて驚き、生徒をあらためて見直すようなことがしばしばある。

さて、私は、53年度2学期、中学2年の学年保護者会の席上、親と教師の話し合いの資料として、生徒の生活と意識についての簡単な調査結果を報告する機会をもった。単純で表面的なアンケートの結果に過ぎないが、それなりに本校生徒の生活や意識のある程度の傾向を知り、問題点を考えるための参考にはなりえたと思う。以下そのアンケートの結果を中心に述べる。

2. 名大附属中学校生徒の生活と意識

○アンケートの対象 生徒全員

1年生 88名（男子43名、女子45名）
 { 2年生 86名（" 46名、" 40名）
 3年生 78名（" 37名、" 41名）

○アンケートの実施時期 1978年10月～12月

(1)現在、学校生活について楽しいと思うか。

	1 年		2 年		3 年	
	男	女	男	女	男	女
非常に楽しい	10	12	11	10	3	4
かなり楽しい	13	23	20	20	20	25
わからない	20	6	8	9	12	8
あまり楽しくない	0	3	6	1	2	3
全然楽しくない	0	1	1	0	0	1
	53	78	68	75	62	71

各学年男女別にみると以上の通りであるか、全学年男女を合わせてみると、「楽しい」が68%、「楽しくない」が7%、「わからない」が25%となる。学年別にみて、

2年生に「楽しい」が最も多いのは、2年生が生徒会や部活動の中心であることや、1・3年に比べて気分的に余裕をもちうることが理由と思われる。男女別では、どの学年も、女子の方が男子より「楽しい」が多い。ところで、「楽しい」が68%というのは、かなり高い率と考えられる。東京都杉並区の調査によると、「学校が楽しくてすすんできているというもの」は男子の2割強、女子の3割弱であったという。⁽⁴⁾ なお、名大附属高校と比較してみると、「学校生活が楽しい」は、中学65%、高校37%である(1977年10月調査)。⁽⁵⁾ 「楽しい」と思っている生徒は必ずしもテストの成績良好者というわけではない。学力不振の生徒たちがかなり「楽しく」活動している傾向が見うけられる。

次に、「楽しい」「楽しくない」の主な理由をそれぞれに簡単にまとめてみる。「楽しい」の第一の理由としては、「友人」「交友」が全学年通じて約半数を占める。第二は「部活動」「学級活動」など、第三は「授業」である。一方、「楽しくない」理由の第一は、1年生の場合「友人とうまくいかない」こと、2・3年生の場合「授業」「学習」である。

(2) A. 現在、部に加入しているか。

	1 年		2 年		3 年	
	男	女	男	女	男	女
はい	40(93)	42(93)	40(87)	33(83)	16(43)	15(38)
いいえ	3(7)	3(7)	6(13)	7(17)	21(57)	26(62)

部への加入状況(2学期後半)は、1年生90%以上、2年生80%であるのに対して、3年生は40%程度である。加入していない、または途中で止めた理由としては、1・2年生の場合、「部がつぶれたから」「その部が不活発だから」「その部がいやになったから」「友だちが止めたから」「適当な部がない」「帰りが遅くなる」「親の反対」「家が遠い」「塾へ行かなくてはならない」「疲れて勉強できなくなる」等であるが、3年生の場合は「3年生になれば当然引退」「勉強で多忙だから」「入試があるから」が決定的な理由となっている。

B. 部で君はどの程度に活動しているか。

	1 年		2 年		3 年	
	男	女	男	女	男	女
非常に活発である	10	9	12	7	1	0
かなり活発である	13	15	13	5	4	2
わからない	12	11	6	6	1	2
あまり活発ではない	5	5	7	9	6	5
全然活発ではない	0	2	1	6	4	6

C. 家庭では君の部活動に対して賛成か反対か。

	1 年		2 年		3 年	
	男	女	男	女	男	女
賛成	30(73)	37(86)	28(72)	18(55)	6(33)	12(67)
反対	2(5)	2(5)	5(14)	8(24)	1(6)	0
わからない	9(22)	4(9)	5(14)	7(21)	11(61)	6(33)

子どもの部活動に対する親の態度として、賛成の率は1年生80%、2年生63%、3年生50%と減っている。これも、テストの成績、受験に対する心配が主な原因と考えられる。

(3) 学級活動は楽しいか。

	1 年		2 年		3 年	
	男	女	男	女	男	女
非常に楽しい	2	3	7	6	1	1
かなり楽しい	8	4	11	18	11	13
わからない	23	22	13	9	16	13
あまり楽しくない	7	9	9	4	7	10
全然楽しくない	3	7	6	3	2	4

全体的にみて、2年生が最も多く「楽しい」と感じている。その主な理由は、2年生の時期が比較的のびのびとした気持ちで集団活動に親しむことができるからであろう。「どんなときが最も楽しいか」という問いに対しては、「クラスの人たちとゲーム、行事などを行っているとき」(1年生24名)「まとまって話し合ったり、行事にとりくんだりするとき」(2年生35名)「みんなでいろいろ協力してなにかやりとげたとき」(3年生23名)等の答えが最も多い。

(4) A. 塾に行っているか。(学習, その他)

	1 年		2 年		3 年	
	男	女	男	女	男	女
はい	33(79)	37(80)	16(35)	22(55)	12(32)	15(37)
いいえ	9(21)	9(20)	30(65)	18(45)	25(68)	26(63)

「一週間に何回行っているか」に対しては、2回(45%)が最も多く、1回(25%)、3回(22%)、4回以上(8%)という順序である。

塾に行っているものは、1年生で80%、2年生で44%、3年生で35%と次第に減っている。全学年では、54%のものが行っていることになる。「文部省統計で見ると、塾にかよっているのは、小学校の高学年生で39.8%、中学生で53.2%である。東京都立研究所の調査では、小・中学生で72%のものが塾にかよっている。」⁽⁶⁾ そうであるが、本校の場合もその数字にほぼ近い。

B. 塾は楽しいか。

	1 年		2 年		3 年	
	男	女	男	女	男	女
非常に楽しい	3	10	6	5	3	6
かなり楽しい	10	10	4	8	4	10
わからない	14	9	5	7	5	9
あまり楽しくない	2	7	1	1	0	1
全然楽しくない	4	1	0	1	0	1

全体としてみると、塾へ行っているもののうち55%が、「楽しい」と感じている。「楽しい」理由は調査しなかったが、学習、芸事等そのものよりも、塾での友人や先生との人間的接触にいつもの楽しさを感じているのではないかと想像される。

(5)家庭での学習時間

(平常時一週間分の一日平均)

	1 年		2 年		3 年	
	男	女	男	女	男	女
0～1時間	12(28)	14(32)	17(44)	13(37)	6(16)	4(10)
～2 "	24(56)	27(61)	20(51)	18(52)	16(43)	16(41)
～3 "	7(16)	3(7)	2(5)	4(11)	11(30)	16(41)
3時間以上	0	0	0	0	4(11)	3(8)

1・2年生においては、1～2時間が圧倒的に多い。3年生になると、2時間以上が40%を越える。

(6)家庭でテレビを見る時間

(平常時一週間分一日平均)

	1 年		3 年	
	男	女	男	女
0～1時間	2	6	3	2
～2 "	14	12	4	5
～3 "	4	3	6	11
3時間以上	0	1	1	5

1年生と3年生の各1クラス分しか調べることができなくて不十分な資料となったか、これとみると、1年生では1～2時間が最も多く、3年生では2～3時間が最も多い。「どんな番組を見るか」(1年生42名のみ対象)に対しては、「黄金の日々」(7名)、「ザ・ベストテン」(7名)、「宇宙戦艦ヤマト」(4名)、「太陽にほえろ」(4名)、「トムとジェリー」(3名)、「エースをねらえ」(3名)、「ニュースワイド」(2名)、「紅孔雀」(2名)等があげられた。

なお、(5)(6)に関連して、中3卒業後の春休み(54.3.21～4.6)における一日平均の読書時間、テレビ、ラジオ視聴時間について調べた別の資料があるので、参考のため簡単に付け加えておく。

	読 書			テ レ ビ			ラ ジ オ		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
0 時 間	4	7	11	1	0	1	4	8	12
～ 1 "	10	12	22	2	1	3	5	3	8
～ 2 "	2	2	4	3	8	11	5	9	14
～ 3 "	1	0	1	5	7	12	1	1	2
3時間以上	2	4	6	8	9	17	4	4	8
	19	25	44	19	25	44	19	25	44

全く読書をしないものが25%。3時間以上テレビを見るものは約40%。また、1時間以上読書するものが25%であるのに、1時間以上テレビを見るものは66%、ラジオを聴くものは55%である。今後の読書指導および視聴覚教育のあり方について考えさせられる数字である。

(7)小遣い銭として家でもらう額はどれくらいか。

	1 年	2 年	3 年	合 計
0～1000円	23(27)	16(19)	9(12)	48(19)
～2000円	38(44)	35(41)	25(33)	98(40)
～3000円	23(27)	27(31)	26(35)	76(31)
3000円以上	2(2)	8(9)	15(20)	25(10)

全学年通じてみれば、1000円～2000円が40%で最も多い。2000円以下は1年生で約70%、2年生で60%、3年生で45%、2000円以上は、1年生約30%、2年生40%、3年生55%となる。貯金増強中央委員会が53年6月から7月にかけて全国6千世帯を対象に調査した結果によると、小学5・6年生1741円、中学生2540円、高校生5045円となっている。そして、小遣いの渡し方としては、「毎月まとめて渡す」が56.8%、「必要のつど渡す」が39.7%だそうである。⁽⁷⁾これと比較してみると、本校生徒の場合、大体、全国平均並みといえそうである。

(8)将来の目標について考えたことがあるか。

	1 年		2 年		3 年	
	男	女	男	女	男	女
はい	20(47)	35(78)	35(76)	28(70)	28(76)	37(90)
いいえ	23(53)	10(22)	11(24)	12(30)	9(24)	4(10)

学年別にみると、「はい」が1年生62%、2年生73%、3年生83%と、学年を追って増えていく。男女別にみると、「はい」は女子の方が男子より多い。

目標として書かれた職業についてみると、次のようである。

<男子> 1年生：設計士、建築士(5名)、教師、エンジニア(各2名)、弁護士、医師、外交官、放送関係、

鉄道関係（各1名）。2年生：俳優，商業，医師（各2名），教師，刑事，司法官（各1名）。3年生：教師（3名），アニメーター（2名），医師，設計技師，音楽家（各1名）。

＜女子＞1年生：教師（8名），保母，医師，刑事，音楽家（各1名）。2年生：教師，医師（各3名），薬剤士，会社員（各2名），放送関係（1名）。3年生：幼稚園の先生（3名），教師，保母，看護婦，福祉関係（各1名）。

参考のため総理府が実施した「子どもの意識に関する世論調査」によると，現代っ子の平均像は，「つましい個人生活が理想とされ，金銭欲や名誉欲が少ない。勉強や進学について悩みが大きく，遊ぶ時間はテレビにかじりついている」ということだそうであり，将来の暮らしについてみると，トップは「趣味にあった暮らしをしたい」（31%），次いで「金持ちでなくても清く正しく暮らしたい」，「いい人と結婚して楽しく暮らしたい」と続く。将来の職業では，「中3の男子は技術者，女子は学校の先生，幼稚園の先生，保母，事務員等」だそうである⁽⁸⁾。上記の世論調査について述べられた「朝日」の社説から少し引用しておきたい。「夢が小さいからといってとやかくいうのはどうだろう。戦前からの出世至上主義は，一方では過度の競争社会を生み，弊害もあった。子どものときからあまりにも金銭欲，名誉欲が強くては，いまの社会で大人になったときどんな人間になるのか不安である。……問題は，子ども時代の生活意識と志望職業がどうであれ，次の世代の社会人として自覚と誇りを持たせ，しっかりした批判力，判断力を養成することである。市民社会のどんな小さな分野でも正しく分担させる社会人として訓練することが大人に課せられた宿題であろう」⁽⁹⁾。

(9)現在，悩んでいることがあるか。

	1 年		2 年		3 年	
	男	女	男	女	男	女
はい	5(12)	23(50)	24(52)	25(63)	18(49)	30(73)
いいえ	37(88)	23(50)	22(48)	15(37)	19(51)	11(27)

学年別にみると，1年生32%，2年生57%，3年生62%と，悩みをもつもの数が増える。男女別にみると，各学年とも，悩みをもつものは，女子の方が男子よりも断然多い。

「何について悩んでいるか」の答えとして書かれた問題を，学年別に，多い順番に列記すると次のようである。

＜1年生＞①友人（9名），②病気・健康・体型（5名），③部活動（3名），④異性（2名），⑤成績，性格（各1）。
 ＜2年生＞①学習，テスト，成績（19名），②友人（15

名），③部活動（7名），④性格，将来の目標（各5名），⑥異性（4名），⑦高校進学（3名）。＜3年生＞①受験・進学（17名），②学習（9名），③友人（6名），④家庭，親（5名），⑤異性・恋愛（4名），⑥金銭（3名），⑦性格（2名）。

「悩みについては，だれかに相談するか。その場合の相手はだれか」については，「相談する」は1年生81名（96%），2年生60名（69%），3年生52名（60%）である。「だれにも相談しない」は1年生3名（4%），2年生27名（30%），3年生34名（40%）と増えていく。

「悩みをだれに相談するか」その相談相手を学年別に列記すると次のようである。

＜1年生＞①友人（49名），②母（17名），③兄弟姉妹（7名），④祖父母（5名），⑤父（3名）。＜2年生＞①友人（42名），②母（10名），③父・兄弟姉妹，先生（各3名）。＜3年生＞①友人（38名），②母（5名），③兄弟姉妹（4名），④先生（2名），⑤父（1名）。

相談相手の大部分が「友人」であることが目立つ（1年生60%，2年生48%，3年生44%）。友人に相談するという傾向は，特に女子の方に強く，これは，悩みの問題に「友人」と答えたものの大部分が女子であったことと関連していると思われる。「友人」と逆に，驚くほど相談相手としては敬遠されているのが「父」と「先生」である。

(10)学校，教師への要望

要望事項を記入したもの，1年生34/88名（39%），2年生34/86名（40%），3年生31名/78名（40%）。

要望事項として書かれたことを，学年別に列記しておく。

＜1年生＞○「担任はえこひいきをするな」○「授業中うるさい人を叱ってほしい」○「先生はユーモアをもってほしい」○「おもしろい授業をしてほしい」○「生徒をなぐるな」等（14名）。○「校内をきれいにしたい」○「教室の用具を新しいものにしてほしい」○「靴の色をうるさく制限するな」○「カバン，スポーツバックを自由にさせてほしい」○「放課時間を長くしてほしい」○「体育館での中学の部活動をもっと認めてほしい」○「部の数をもっと増やしてほしい」○「部活動を早朝にやりたい」等（18名）。

＜2年生＞○「先生は生徒に親しみやすく，相談に行きやすくしてほしい」○「先生も部活動に参加してほしい」○「えこひいきをするな」○「生徒の立場になって教えてほしい」○「授業をていねいにしてほしい」○「基本をわかりやすく教えてほしい」○「生徒をさわがさないように」○「テスト結果の順位をはっきり知らせよ」等（15名）。○「部活動を活発化するように指導してほしい」○「学校行事をもっと増やしてほしい」○「生徒集会を計画的に開くようにしてほしい」

○他校との交流の機会を設けよ」等（7名）。○「校内の設備を充実させよ」○「グラウンドの壁にはしこをつけて」○「先生は権力を横暴にふるうな」○「茶色靴などを一方的に禁止しないで」○「もっと学校全体に活気を。部活、委員会を活発に！先生もそういうことにとりくんでほしい！！」等（10名）。

<3年生>○「生徒の悩みを真剣に考えてほしい」○「もっと生徒の立場を尊重してほしい」○「自主的活動の場をもっと設けてほしい」○「えこひいきをするな」○「学力による差別をやめよ」○「出席簿に出欠をきちんと記入してほしい」○「教師もただの人間だから神様のような態度をとらないで、ただ多くの経験を積んだという点でいろいろなことを教えてほしい」

○「先生たちは一人ひとりの生徒のよさをほとんど理解していない。成績のよい、わるいで生徒の扱い方がちがう。このようなことから生徒の非行、家出、自殺が増えるのだと思う」等（16名）○「生徒会を活発にさせてほしい」○「靴についてもっと自由にしてほしい」○「規律をもっときびしく守らせてほしい」○「室内の清そうをしっかりとやりたい」○「設備を整え、教室の床をはりかえてほしい」等（8名）。

11 家庭への要望

要望事項を記入したもの、1年生26/90名(29%)、2年生25/86名(29%)、3年生27/78名(35%)。

<1年生>○「勉強しているときにうるさく口を出さないでほしい」○「しつこく注意しないでほしい」○「もっと子どもを信じて自由にさせよ」○「他家の子どもと比べないでほしい」○「兄弟で差別するな」○「勝手に子どものものにさわるな」○「一人の部屋がほしい」等。

<2年生>○「勉強をやれやれとうるさい。成績についてとやかく言わないでほしい」○「勝手に勉強部屋に入るな」○「子どもの日記などにさわるな」○「あまり期待ばかりしないでほしい」○「家族みんながもっと接触しなければいかん！」○「母はいつでも短気だからそういう態度は止めてほしい」等。

<3年生>○「あまりうるさくいろいろと言わないようにしてほしい」○「子どもを信じてほしい」○「子どものことをもっと真剣に考えてほしい」○「成績、点数にこだわりすぎるな。受験のことしか頭にないようていやだ」○「もっと親も本を読んで勉強してもらいたい」○「明るい家庭にしたい」○「親はあんまりとろいことでけんかをするな」○「親ばか(子信過剰)にならないでほしい」○「両親が自分のことをすごく心配してくれるのはうれしい、それはありがたいと思うけれど、でも時々それが迷惑になったりする。もっと自分をつき放してほしい時がある」等。

ところで、以上(10)(11)において、学校および家庭に対する生徒たちの要望をまとめてみたわけだが、ここで要望の内容より先に、まず、要望を答えた生徒が少ない(30%台)ことについて考えてみなければならない。

『青少年白書』(51年度)の内容についてふれた『朝日新聞』の社説から引用してみよう。¹⁰⁾「……………白書はまた、このごろの青少年は家庭にも学校、職場にもほぼ満足しているという。だかたしてそうか。注目しなければならないのは、「いま通っている学校に何か希望することがあるか」という設問に“ない”という答えをした者がほぼ半数もいたということだ。……………この数字はなにを示しているのか。これを“学校生活に満足している”とか“学校への期待と現実のすれがより少ない”とかと解釈すべきなのだろうか。事実はその正反對なのかもしれないのだ。希望は山ほどある。しかしもう何を言ってもはじまらないから黙っているということではないのか。そうだとすればこれは満足どころか、シラケきったあきらめの表現である。その本音をきくためには続けてもう一問“なぜ何も学校に希望しないのか”をきくべきだった…。この記事は大変参考になる。私も、本校生徒たちの大半が要望事項を記入しなかったことについて、「希望は山ほどある。しかしもう何を言ってもはじまらない」というのが、多数のものの本音ではないかと解釈する。

なお、以上、本校生徒の生活と意識に関するアンケート結果を考察するに当たっては、本校の特殊条件も考慮に入れなければならないと思われるので、それらの主な点だけを簡単に付け加えておきたい。

①1学年2学級の小規模校であること。②ほぼ中・高一体の学校運営が行なわれ、90%以上の者が附属高へ進学すること。③本校への入試選抜は、学力テスト中心ではなく、抽選を主としていること。④生徒の住居は名古屋市内全域にわたっていること、等。

3. 生徒の声にどう対応するか

53年度の最後の授業(54.3.19)で、2年生全員に対し、「中2を終えるに当り特に考えること」という題で自由に感想や意見を書かせてみた。86名分の文章を読んで、内容的に分類すると次のようであった。

①受験・進学のこと(26名)、②学校生活の過ごしかた(16名)、③学校行事、部活動等(13名)、④友情・恋愛(12名)、⑤性格(6名)、⑥クラス(5名)、その他(7名)。

以下、生徒の気持ちの端的に表されている文章をいくつか断片的に記しておきたい。

○「現在、中2を終え中3になると、いやでも受験ということばかりのしかかってくる。ほくとしては、テス

ト自体がきらいである。なぜなら、現在はテストだけでその人物を評価しているとぼくには思えるからである。テストはその時の調子によって左右されるため、それだけで能力を評価されると困る。ぼくは緊張したりすると、気が弱いので体の一部が痛んだりして、ベストにもっていけないときがあるからである。あの独特の感じもきらいで、もっとリラックスしてうけられたらと思う。また、現在のテストではその人物の一部しかわからず、性格みたいなものがよくわからないと思う。とにかく、テストがぼくをしめつけていると思う。性格にもっとゆとりをもちたいものである。」(男)

○「ぼくは受験についてこう考えている。きびしいスポーツだと。それは自分の能力、実力によって区別されるからである。能力主義社会とは争いの連続ではなからうか。今の世の中、実力のある者のみ生き残れるのだ。3年生は充実した一年にしたい」(男)。

○「いちばん気がかりなのは勉強のことだ。父や母にどうしてもこの高校にはいってもらえと言われる。ぼくもやることはやるが、あまり自信はない。最近、母がかってに部屋にはいってきたり、うるさくつきまとして注意ばかりするので困る」(男)。

○「はやくも中学最高学年になろうとしている。なんだかとても不安な気がする。中3になると、テスト、テストに追われるような気がしてならない。おまけに最大問題の受験がもうそこに待ちかまえている。何かもう息がつかまっちゃういそうではない」(女)。

○「私はかなりめぐまれていると思う。実力テストや模擬テストなんかは公立中学よりよっぽど少ないし、附属が隣りにあるのだから、「まあ自分なりにがんばればきっとはいれるだろう」といつも思う。だからといって勉強をおろそかにしたくはないし、中3になったら少しずつ勉強の時間や内容も広げていきたいと思うし、ストレス解消にスポーツもやりたいと思う」(女)。

○「最近とくに感動しなくなり、それが無気力につながりつつある。つまり積極的に本を読んだり音楽をきいたりするということは感動を期待してのことだ。ところが感動しにくい心は期待をなくしつつあり、期待のない行動は空しくなる。それで無気力になりつつあるのだ。感動のない自分が怖い」(女)。

○「3年生になると勉強がいそがしくなるけど、今の2Bのようなもりあがった楽しいふんいきの中で学校生活をしていきたい。クラスメート、担任によってクラスのふんいきが左右されると思う。だから3年は楽しく、かつ、きびしい友人と同じクラスになりたい。ぜったい楽しくやっていきたい」(男)。

○「近頃、心に思っていることを人に話すことがなくなりました。前は気軽に話していたのですが、やはりどんなに仲のよい友だちでも他人は他人です。こんな

ことを思うようになったことがとても悲しいし寂しい。私はよく言われます、人の心を思いやれと。自分では思っているつもりなのですが、それと反対に人を傷つけることを言うてしまうことがあります。でも中学に入ってから自分というものをじっくり見つめることができ、少しばかり、ほんとに少しですが、悪い性格を直すことができました」(女)。

○「自分の性格の悪いこと、自分がどうあるべきか、ことあるごとに迷い自信がない。今一番の悩みは「性格」についてです」(女)。

○「時間がほしい、自由な時間がもっとほしい。自由な時間があったら、もう少し自分自身よくなると思うから。」(女)。

これらの感想を読むと、2年生を終えて3年生に進もうとしている中学生の気持ち、希望や自信よりもむしろ不安と緊張におののくような心境が伝わってくる。不安の主な理由は、成績や受験のことである。その背後には、子どもに対する親の期待とあせりもうかがわれる。それがまた、子どもにとっては重荷となり、いらだちの原因になってもいる。ゆとりある教育ということばが新教育課程の旗印に掲げられないから、現実の受験体制下においては、それが空念仏に終るおそれ大きい。教師や親はいたらずに競争心をあおりたてることなく、まず、生徒、子どもの人間性、個性を大きな目で眺め、点数に表れない性格、行動面での評価を忘れないだけの心のゆとりをもたなくてはならない。学校、家庭間では、生徒、子どもの問題点だけでなく、もっとさまざまな角度からよい点も積極的に話題にしたいものである。

生徒と生徒、親と子、教師と生徒、それぞれの間での心からの人間的ふれあいを、生徒たちは、つよく求めている。それにこたえうるような日常的配慮こそ最も必要と思われる。

(注)

- (1) 『朝日新聞』 54. 3. 2
- (2) 愛知県教育委員会『精神健康指導の手びき 第1集 1974』 P. 5
- (3) 望月一宏『中学生その日々』岩波新書 P. 183
- (4) “ “ “
- (5) 米山 誠「教科外活動の指導について」(『名大教育学部附属学校記要第23集, 1978』 P. 39)
- (6) 望月一宏 前掲書 P. 153
- (7) 『朝日新聞』 53. 10. 14 「子どものこづかい」
- (8)(9) 『朝日新聞』 53. 8. 25 社説「小さく固まる子どもの夢」
- (10) 『朝日新聞』 51. 11. 16 社説「辞典のような青少年白書」